

がん患者に配慮した ヘアハットに関する意識と現地の状況（第1報）

3カ国の視察にみる帽子の比較・考察

AWARENESS AND THE LOCAL SITUATION OF HAIR CAPS DESIGNED FOR CANCER PATIENTS (FIRST REPORT):

Cap Comparison and Discussions from Inspection Visits in Three Foreign Regions

見寺 貞子 デザイン学部ファッションデザイン学科 教授

笹崎 綾野 神戸樟蔭女子学院大学 人間学部 ファッション・ハウジングデザイン学科 専任講師

Sadako MITERA Department of Fashion and Textile Design, School of Design, Professor

Ayano SASAZAKI Department of Fashion and Housing Design, Faculty of Human Sciences,
Kobe Shoin Women's University, Lecturer

要旨

本研究は、日本人の死因の第一位であるガン患者に対し、治療中にも適応できる機能性（着心地）と美観（見た目の美しさ）に配慮したヘアハット的设计理論構築を目的としている。

本報では、2013年から2014年にかけて、北欧3カ国と米国、中国上海の福祉施設及び福祉機器展示会を視察した際に、がん患者に配慮した帽子の現状と課題について調査した内容を報告する。

結果、今回の視察から、国により、がん患者に配慮した帽子に対する意識に差異があった。また、帽子のデザインに関しては、日本は、編み地が多く、柄ものはストライプとチェック、花柄、幾何柄が少しある程度で、ほとんどが無地であった。反面、北欧と米国では、編み地の他に織物もあり、柄ものが多く、巻き式などデザインにバリエーションがあった。素材に関しては、日本の方が編み地が多く、ソフトな肌触りや天然素材100%使用にこだわっていた。

Summary

This study is intended to build a theory of designing hair caps for patients with cancer, the biggest killer of Japanese people, in consideration of functionality (wear comfort) and aesthetics (apparent beauty) so that they are wearable even during treatment. This report describes the current status of and challenges to caps designed for cancer patients that were researched during inspection visits to welfare facilities and welfare equipment exhibitions in three Scandinavian countries, the United States and Shanghai, China, in 2013 and 2014. Results from the recent inspection visits revealed differences between the countries in people's awareness of caps designed for cancer patients. It was also found with respect to cap design that many of those caps in Japan were knit ones, mostly plain-colored, with some having a pattern such as being striped, checked, flowered or geometric. Meanwhile, in the Scandinavian countries and the U.S., textile caps as well as knit ones were available, with many having a pattern, and there was a variation in design, Japan edited the material, and a lot of knitting place was made much of about soft feel and natural material 100% use.

1. はじめに

本研究は、日本人の死因第一位であるがん患者に対し、治療中にも適応できる機能性(着心地)と美観(見た目の美しさ)に配慮した「ヘアハット」の設計理論構築を目的とする。本報で示す「ヘアハット」とは、髪の毛と帽子を融合させたようなかぶりものの造語である。「ハット」は、つばのある帽子の意味だが、本報では、キャップやブルガ、ターバンなどを称して「ハット」(帽子)と使用している。現在、全脱毛時期のがん患者対応の被り物として、ウィッグ(かつら)と帽子がある。これらは、別々に着用するものと考えられているが、帽子のみを被ると、全脱毛状況が他者にわかってしまうことが問題とされている。そこで、帽子のみを被っても、髪の毛と帽子を融合させたようなデザイン開発ができないかと考えた。「ヘアハット」は、彼らの治療環境を快適にするとともに、帰宅後の生活の質向上の一助になると考える。

本研究の事前調査として、2013年9月に北欧3カ国(デンマーク/コペンハーゲン、スウェーデン/ストックホルム、フィンランド/ヘルシンキ)の福祉施設と病院、同年10月にアメリカ/フロリダ州オーランドで開催された福祉機器展「Medtrade2013」、2014年5月に中国/上海で開催された福祉機器展「CHINA AID 2014」を視察し、がん患者に配慮したウィッグ(かつら)と帽子にする意識と現地調査を行った。本報では、本調査に関して報告する。

2. 研究の背景

2-1 がん患者の生活の質向上に対する課題

現在、日本人の死因の第一位に「がん」があげられている。患者数は、1996年には136.7万人でそれ以降下降気味であったが、2005年は142.4万人、2008年には152万人に達し、2020年には184万人になると予測されている。2003年国立がんセンターの推計値によると、がんの生涯リスクは、男性54%、女性41%と、日本人の2人にひとりのがんになり、3人にひとりのがんで死亡するという重い疾病とされている。がんは加齢により発生リスクが増大し、高齢化が急速する日本にとって大きな課題

となっている。がんの治療法としては、外科療法や抗がん剤使用の化学療法、放射線療法などが用いられるが、化学療法の副作用により、脱毛や倦怠感、頭痛、吐き気、むかつきなどの症状があらわれる。この副作用は治療期間中続き、繰り返し長期間治療を受けるがん患者にとっては心身の負担も多く、入院中から帰宅後も副作用が続き、生活の質向上の手立てがない現状である。がんの発症は男性が多いが、生存率は女性が高く、治療中の心身の快適感や安らぎ感が求められる。

2-2 がん患者に配慮したウィッグと帽子の現状と課題

高齢による抜け毛やがん治療の副作用による全脱毛時期に対応するウィッグのデザイン開発が進んでいる。素材は、人毛から人毛風合成繊維まで多数開発され、髪の毛のカラーも髪型も豊富で選択肢も多い。付け方もネットの上からの装着やピンによる装着などがある。しかし、がん患者の場合、治療期間中、身体状況により頭皮が痛く装着できない場合もある。また、価格が高く購入できないというがん患者からの意見も多くあげられている。がん患者の脱毛に配慮した帽子も市販されているが、デザインのほとんどは、筒型である。素材は、通気性と保温性を考えた綿、絹、毛の平織素材。色は、ブラック、ブラウン、グレーが中心で、グリーン、オレンジ、ピンク、イエローなど、柄は、ボーダー(縞柄)とチェックがほとんどである(図1.2)。現在では、ウィッグと帽子のコンビネーションされたデザインも販売されている。

本研究は、がん患者が化学療法時に、副作用で髪の毛が脱毛してしまう状況を市販の「帽子」でカバーしている点に着目した。髪の毛は当然あるものと考えているが、がんの化学療法により副作用で全て脱毛する期間がある。その間、脱毛した頭部をカバーする方法として、ウィッグや帽子を使用する機会が多い。「改まった場所や人への訪問時にはウィッグを被るが価格が高い。日常生活では簡易に着用できる市販の帽子を被るが、がん患者用の帽子は色数もデザインも少ない(図1)。がん治療の時期により素材によって頭皮が痛い。帽子のみを被ると、全脱毛

状況が他者にわかってしまう。」など、自身が入院していた時、同室の入院患者から聞いた言葉である。がん治療は、心身への副作用が強く暗くなりがちである。少しでも心身を緩和し、生活の質向上に繋がる手段として、「おしゃれで付け心地の良い帽子」の調査研究が、ファッションデザイン分野では不可欠であると考えた。



図 1.2 がん患者用の帽子 (引用文献1)

3. 視察の内容

3-1) 北欧3カ国の視察

2013年9月2日から10日にかけて、北欧3カ国の福祉施設や病院を中心に視察した。

3-1-1) Center for Kraft & Sundhed Kobenhavn

Center for Kraft & Sundhed Kobenhavn は、デンマーク/コペンハーゲンに所在する18歳以上のがん患者のためのデイサービスセンターである。建物は、2009年にデザインコンペで採用された。光が室内に入る教会のようなトレーニング室、2階のベランダに庭がある。がん患者が、心地よい一日を送れるように、リハビリ室、学習キッチン、集会所等を設けており、室内には、アートが活用されていた。ダンスは人気の高いプログラムで、音楽をかけて身体を動かすと活力が生まれるという。

集会所は、がんについての悩みや退院後の生活についてなど、看護師や仲間と話をする場として設けられている(写真1.2.3)。



写真 1.2 Center for Kraft & Sundhed Kobenhavn 内の風景



写真 3 Center for Kraft & Sundhed Kobenhavn 内の風景

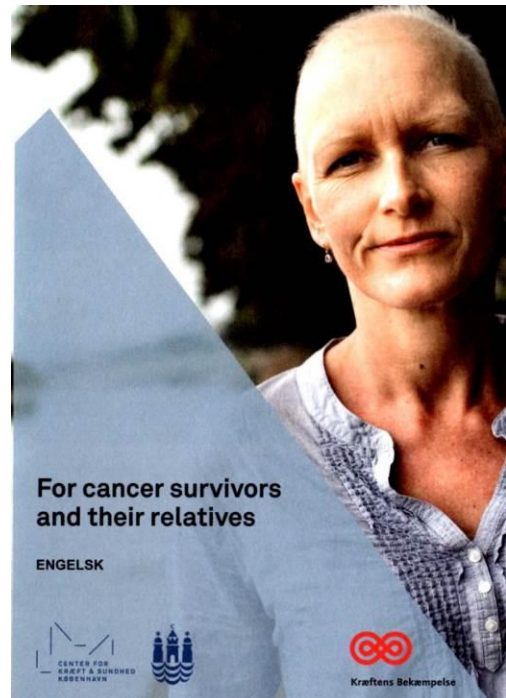


図 3 Center for Kraft & Sundhed Kobenhavn のパンフレット

ここで、がん患者の帽子に関して聞いてみると、がんで抗がん剤治療を受けて脱毛になった患者に対して、帽子を

被る事は進めていない。それよりも、がんになって脱毛しても、あえて帽子をかぶらないという意味を示された(図3)。自身はがんである。がん治療を受けている。という状況を隠さない。全脱毛状態を隠すという考えしかなかった著者にとっては、新たな視点であった。

3-1-2) 「LUNA HEADWEAR」

「LUNA HEADWEAR」は、デンマーク/コペンハーゲンに所在するがん患者用の帽子を通信販売している会社 (<http://lunahvid.dk/>) である(図4)。



図4 「LUNA HEADWEAR」のホームページ(引用文献2)

この会社は、がん患者のために GOTS ラベルを取得し、100%オーガニックを使用した帽子をデザインしている。頭にフィットする、編み素材を使用した丸い帽子をベースに、長い紐やスカーフをプラスしたデザインを特徴としている。幅広長い布を帽子の上や横で巻いたり、髪の毛のように流すスタイルや、自身でリボンにしたり、コサージュにするなど、個々の嗜好により多様なデザインが楽しめる帽子であった。HP の中では、紐やスカーフの巻き方も動画でわかりやすく説明している(図5~8)。価格は、299~349DKK(約 5,500~6,400 円)で、日本と比較して、少し高級品である。日本では、編み地の帽子で、無地が多く、柄ものでは、ストライプがほとんどである。日本は、デザイン性というよりも、着心地感や機能性(簡単にかぶれる、頭皮を隠す、抜け毛が床に落ちないようにする、など)を重視している傾向にある。北欧では、機能性よりも個々のファッション性(柄の楽しさや巻き方に工夫するなど)を重視しており、両国の帽子に対す

る捉え方に差異が見受けられた。



図5~8 「LUNA HEADWEAR」のスタイリングアドバイス(引用文献3)

3-1-3) Konferensrum Fdsviken

スウェーデン/ストックホルムに所在するがん患者の情報センター Konferensrum Fdsviken を訪問した。がんに関する情報収集と発信を行うとともに、がん患者の相談センターも運営している。がん患者の帽子に関して聞いてみると、ストックホルムでは、がんで抗がん剤治療を受けて脱毛になった患者に対して、国からウィッグを1個無償で提供しているという。しかし、洗い替えは自身で購入するため、利用者からは1個の配布では替えがないので洗えない、匂いが取れないなどのクレームが出ているが、その対策は未だ考えられていない、という。

帽子に関しては、がん患者特定の帽子は無く、個人が市販されている帽子を着用したり、バンダナを巻き付けている人、スカーフを巻いている人など、個々に対応しているとのこと。今回、日本のニット帽を持参して見せた所、肌触りが良くて、褒められた。ストックホルムには、このような素材感の良い帽子がないため、販売するとよく売れるのではないかという意見を頂いた。国により対応の仕方に差異があった。

3-1-4) BIO MEDICUM HELSINKI

フィンランド/ヘルシンキにある総合病院の BIO MEDICUM HELSINKI を訪問した。この日は、休診であったが、病院内には、がん患者のための書籍が置いてあった。表紙のかわいい帽子は、がん患者のための帽子である(写真4)。病院内で着用する病院着は、とかく、シンプルで機能的なデザインが多い。街中でも、ユーモアのあるデザインが多く見受けられた(写真5.6)。このようなデザインは、心身ともに楽しく快適にさせる効果があると考え、今後のデザインのヒントとしたい。



写真4 BIO MEDICUM HELSINKI 院内の書籍



写真5.6 フィンランド/ヘルシンキの街中に見られる帽子

また、院内の売店では、アクセサリやブラウス、スカ

ーフなど、ファッションブティックに販売されているようなアイテムが展開されていた。院内であっても、日常生活のような環境が確保されていた。また、お見舞いに来た子供たちのために、ムーミンのバッチや本も販売されていた。長引く病院での滞留時間を少しでも楽しく感じることができるようにとの配慮であった。

3-2) アメリカ合衆国「Medtrade2013」の視察

2013年10月10日に、アメリカ合衆国/フロリダ州/オーランドで開催された福祉機器展示会「Medtrade2013」(メディトレード2013)を視察した。

この展示会は、米国商務省より海外バイヤープログラムのひとつに選定されている福祉機器展で、春と秋の年2回開催されている。出展物は、医療機器、呼吸・酸素製品、寝具・ベッド用品、糖尿病用品、入浴関連、ベッド・マットレス、日常生活支援、介護用品、排せつ用品、リフトなどのホームヘルスケア用品などで、出展企業は約550社で構成されている。

今回は、糖尿病や肥満、心臓疾患などに対する関連機器類が出展やその対策等が紹介されていた(写真7)。



写真7 展示会の風景

ヘアケア関連企業の出展は、「Gemtress」というメーカーのみで、ウィッグを中心に商品化しており、帽子は、「Designer Head Wear Styles」というブランドで展開されていた(写真8.9、図9)。

ウィッグに関しては、髪の毛のカラーバリエーション

はあるが、品質に関しては、日本の方が良いと思われた。帽子に関しては、編みと織り素材が使用されており、デザインは、かぶり式(円筒形)と巻き式(バンダナ使用と大判スカーフ使用)があり、巻き式が商品として多く展示されていた。巻き方も、個々の嗜好に合わせて、みつ編みにしたり、髪の毛のように流したり、多様な巻き方が可能で、柄も12種類展開されていた(図9)。

価格は、11.5~23.5ユーロ(約1,600~3,300円)と、日本と比較して同等であった。デザインの考え方は、北欧と同様で柄ものが多く、巻き方により個性が表現できるデザインが多く見受けられた。日本と比較して捉え方に差異が見受けられた。



写真 8.9. 「Gemtress」の展示



図9 「Gemtress」のパンフレット

3-3) 中国/上海「CHINA AID 2014」の視察

2014年5月28日に、「CHINA AID 2014」を視察した。この展示会は、中国のリハビリテーション分野におけるトップレベルの展示会である。アジア・ヨーロッパを中心に、12カ国・地域から300社を越える企業が参加していた。出展物は、医療機器、呼吸・酸素製品、寝具・ベッド用品、糖尿病用品、入浴関連、ベッド・マットレス、日常生活支援、介護用品、排せつ用品、リフトなどのホームヘルスケアで、日本の企業も出展していた(写真10~13)。展示会では、糖尿病や肥満などに対する関連機器類の出展やその対策等が紹介されていた。ファッションデザイン分野では、靴やサポーター、杖は見受けられたが、帽子やウィッグのメーカーは出展していなかった。中国の展示会の特徴として、マッサージ機、健康食品なども多く展示されており、来場されていた多くの高齢者が試されていた。また、現在の中国の深刻な大気汚染の問題への対処法として、さまざまな空気清浄機や加湿器等も展示されていた。上海市福祉施設の授産商品の販売もされていた。

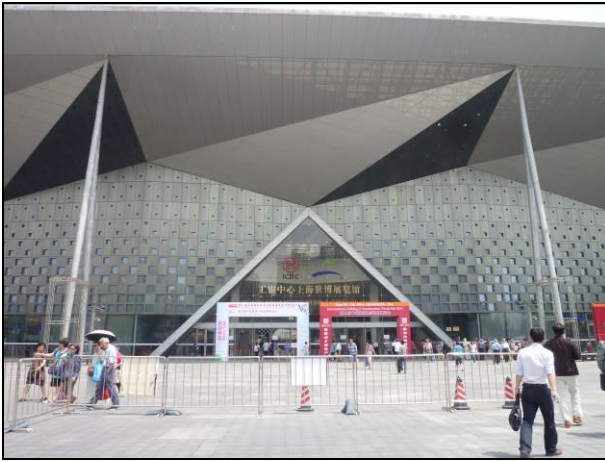


写真 10～13 「CHINA AID 2014」展示会の風景

4. まとめ

本報は、がん患者に対し、生活の質向上の一助になると考える「ヘアハット」の設計理論構築を目的に、2013年から2014年にかけて調査した内容を報告した。

今回の視察から、国によりがん患者に配慮した帽子への意識の差異が明らかになった。デンマークでは、帽子はあえてかぶらないという考え方や「帽子プラス1」のデザインで多様な表現ができる帽子と出会えた。スウェーデンでは、国からがん患者に対してウィッグを支給しており、がん患者専用の帽子に対しては、意識が希薄である現状を知った。フィンランドでは、がん患者の帽子や市民が着用している帽子に、日本では見られない楽しいデザインが多く見られた。アメリカでは、巻き式のデザインで柄素材が多く使用されていた。中国では、がん患者用の帽子は存在しなかった。

デザインにおいても差異があった。帽子のデザインに関して、日本は、筒型がほとんどで、柄ものはストライプとチェック、花柄、幾何柄が少しある程度でほとんどが無地であった。反面、北欧と米国では、編み地の他に織物もあり、柄ものが多く、巻き式などデザインにバリエーションがあった。素材に関しては、日本の方が編み地が多く、ソフトな肌触りや天然素材100%使用にこだわっていた。今回得た資料から、「ファッションデザインと医療とケア」の関係を、帽子のファッション性と機能性、さらに個々の身体状況やライフシーンに合わせて、デザインを探求し、がん患者の生活の質向上を目指したヘアハットの研究・開発を進めていきたい。

■引用文献1：SVENSON パンフレット 2014

引用文献 2.3：<http://lunahvid.dk/>

最終アクセス日 2014年7月25日

■参考文献：バリアフリー展 <http://barrierfree.jp/>

最終アクセス日 2014年7月25日

i GOTS ラベル：織物に少なくとも70%の有機繊維を含まなければならない素材を使用し、染料および他の添加剤も環境衛生基準を遵守しなければならない。GOTS 認証機関は、OTA（米国）、IVN（ドイツ）、ソイルアソシエーション（英国）と JOCA（日本）の4団体の会員制組織から成立している。